

## 第24回福島県双葉郡教育復興ビジョン推進協議会議事概要（修正済）

### I 開催場所および場所

日時：2023年2月17日（金）13:30～16:00

場所：広野町文化交流施設 一ひろの未来館（〒979-0403 福島県双葉郡広野町下浅見川字築地73番地1）

### II 委員

別紙名簿のとおり

### III 資料

- 第24回双葉郡教育復興ビジョン推進協議会議事次第
- 第24回双葉郡教育復興ビジョン推進協議会\_席次
- 資料1 福島県双葉郡教育復興ビジョン推進協議会委員名簿（2023/2/17版）
- 資料2 福島県双葉郡教育復興ビジョン推進協議会（第23回）議事概要
- 資料3 令和4年度双葉郡教育復興ビジョン取組実施報告\_230217
- 資料4 令和5年度双葉郡教育復興ビジョン推進体制・委員会等の構成、取組一覧（案）
- 資料5 令和5年度双葉郡教育復興ビジョン実施計画（案）
- 資料6 【R4文科省説明資料】避難指示区域等内における魅力ある教育環境づくりに 向けて
- 資料7 福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校活動報告資料

### IV 議事

#### 1. 開会

##### 1) 開会挨拶（秋元副座長・川内村）

今年度は本協議会と「ふるさと創造学サミット」について被災後初めて地元で開催することができた。双葉郡の教育復興は新たなステージを迎えている。当協議会としては第3期の推進計画に基づき各種事業を着実に実践していくことになるが、地域特性を生かしながら教育復興と地域復興の相乗効果を図っていききたい。

##### 2) 委員自己紹介（省略）

#### 2. 前回（第23回）議事概要確認【資料2】（全会承認）

#### 3. 議事

##### 1) 今年度の各取組実施状況について【資料3】

###### ○ 事務局（清野）

〔全体的な取組状況〕 双葉郡地域学校協働本部の会議は檜葉町地域学校協働センターを会場に対面で開催し、当日は利用する子どもたちの様子も確認できた。「第9回ふるさと創造学サミット」は現地とオンラインを併用したハイブリッド開催となった。本サミットは双方向のやり取りができる学びあいの場として定着しており、他校の同年代の子どもたちと関われるよい機会になっている。小学校絆づくり交流会は残念ながら中止となったが、中高生の交流会はオンラインで開催することができた。次年度は対面での開催を予定している。教職員による双葉郡子供未来会議は、ふたば未来学園にて対面で開催することができた。「ふるさと創造学の現在地とこれから」について意見交換を行っており、出された意見については今後の取組みの内容の改善に生かしたい。6年目を迎えた「ふたば生徒会連合」の活動は各校の生徒会活動のひとつとして定着しており、町村を超えた話し合いにも深まりがみられる。その他詳細は資料を参照されたい。

###### ○ 秋元副座長（川内村）

〔双葉郡地域学校協働本部〕 双葉郡地域学校協働本部は、3年ぶりに対面での会議となり、各町村の活動状況を紹介しながら意見交換を行った。その中でICTを活用してリアルタイムで情報を発信して

共有していこうという提案があり、それを採択をした。

当協働本部は、被災によって地域資源が乏しい現状を鑑み、町村を超えて融通しあって子どもたちの学びを支えたいという目的で設置した経緯がある。現在、それぞれの町村において特性を生かして実践しているが、帰還できていない2町においては依然として困難が多いように感じられる。双葉地区教育長会が福島大学人間発達文化学類と締結した包括連携協定により、同学類の豊富な人材活用が可能になっていることを共有し、今後も子どもたちに実践的で探究的な体験活動と学びの場を提供することでふるさとへのアイデンティティを高め、将来の帰還や地域づくりの人材育成につなげていくという最終目標を堅持し、今後もそれぞれの町村らしい活動を実践していくことを確認した。

○ 岩崎委員（富岡町）

〔ふるさと創造学サミット〕 今年度は初めての双葉郡での開催となった。対面・オンラインのハイブリッドであったが、当日の参加者は現地と Zoom 参加を合わせて、児童生徒 538 名、教職員 158 名、その他関係者 41 名、YouTube 視聴者 85 名の、計 822 名であった。双葉生徒会連合によるオープニングセレモニーでは会場から大きな拍手が送られ、町村ごとの内容紹介やクイズは会場を大いに沸かせた。

振り返りアンケート結果を紹介する。児童生徒のアンケートでは「来年も双葉郡全体の学校が集まってサミットができればいい」「この経験はいつか生かされると思う」などの意見が寄せられた。教職員からは「対面だからこそそのよさが十分に発揮された」「他校とのよりよい交流の在り方を検討していきたい」という感想であった。関係者からは「双葉郡の実践が県全体の探求を牽引している」「サミットをゴールとせず次のプロセスにつなげたい」という意見があった。YouTube ライブ配信視聴者からは「子どもたちの姿に感銘を受けた」「この取組は他町村にも影響を与えている」ということであった。また、双葉郡内で対面で開催できてよかったという回答が多くあった。ただ、開催会場を含めた運営方法や交流の在り方については改善の余地があるという指摘があり、次の開催に生かしたい。

○ 青木委員（檜葉町）

〔絆づくり交流会〕 「絆づくり交流会」は残念ながら中止になった。私が担当になってから一度も開催されてないため、ぜひ今年は開催したい。第1回目の実行委員会において、ふたば未来の生徒から中学生による企画運営の提案があった。これは、小中の子どもたちの交流がもっと必要だと感じての提案であった。そこで、中学校の実行委員を各校に募集したところ、檜葉中の生徒の応募があったため、未来学園の高校生2名と檜葉中の3名の計5名で中学生実行委員会組織して活動していたが、残念ながらコロナウイルスの感染状況から中止ということになってしまった。

郡内の子どもたちの数は徐々に増えているものの、依然として少なく、学年の横のつながりを持てるような教育活動が難しい学校もある。その意味において、本事業は重要な取組であり、次はぜひとも対面で開催したい。

○ 根本委員（広野町）

〔中高生交流会〕 中高生交流会はコロナ感染拡大によってオンラインでの開催となった。参加者は、生徒が 285 名、教職員 85 名、関係者 3 名、YouTube の視聴者が 102 名、計 475 名であった。オンラインであっても生徒間でやり取りできたことは前進だと感じている。ただ、生徒が長時間にわたって話を聴く形態になったため、生徒の特性によっては困難を伴った印象があった。また、授業の中身がなかなか決まらなかったり、決まったあとの連絡に遅れが生じるなど課題も残った。余裕を持って学校側が事前に準備できるようなスケジュールにしたい。

〔子供未来会議〕 2月13日にふたば未来学園中学校・高校で子供未来会議を開催した。ふるさと創造学自体が教員主導になっているのではないかとの声もあるが、実際には子どもたちが真剣に調べ学習をして自分の思いやアイデアを発信している。ふるさと創造学は、地域の現状や歴史を理解し、ふるさとをどのように発展させるか、どのようにしてふるさとを支える人材になるかを学ぶものであるが、さらにその先、自分がどのような目標に向かってキャリアを積んでいくのか、どのように自己実現していくかを支えるものだと考える。そういった視点から、ふるさと創造学を子どもたちの先を見越した探究活動としていきたい。

○ 小野田委員（葛尾村）

〔ふたば生徒会〕 ふたば生徒会では月1回ペースで30分ほどの短時間のオンライン会議を開いているが、最近ではかなり慣れ、積極的に自分の意見を出している。サミットのオープニングやクロージン

グのセレモニーの企画も自分たちでアイデアを出てまとめる経験をした。他校の子どもたちの意見や発表のしかたに触れることで互いに刺激を受けている様子がうかがえる。

各校の生徒会では、それぞれ実情に応じて、あいさつ運動やボランティア活動、あるいは、いじめ撲滅に生徒会として取り組んだりしている。生徒会が交流して他校の取組を知ることは、互いの生徒会活動の向上のためにも有意義である。その場かぎりのミーティングに終わらず、持ち帰って自校の生徒会がよりよいものになるようなきっかけの会議にしていきたい。

○ 安彦委員（文部科学省初等中等教育局）

〔感想〕 ふるさと創造学サミットに参加したが、非常に活気があふれていたことが印象深かった。狭い人間関係だと多様な考え方に気づかないこともあるが、このような場があることで刺激を受け、いい取組がどんどんつながっていくのではないかと思われる。今後の盛り上がりにも期待したい。

○ 里見委員（文部科学省総合教育政策局）

〔感想〕 各取組の状況を拝聴し、一つ一つの事業にご担当を決めて丁寧にフォローされている様子を知ることができた。今の小・中・高校生たちが大人になったときにまちづくりの担い手になっている姿が縦ラインで見えてくるようで、全国でも優れた取組だという感想を持った。

私自身が担当することのひとつに地域学校協働本部がある。福島の取組も非常に先進的であるが、もうひとつの取組としてコミュニティ・スクールがあり、現状では難しい場合も、今後、住民の帰還が進んだ折には導入についても検討をお願いしたい。また、高校生の留学で「トビタテ！留学 JAPAN」という事業をスタートし、募集も開始した。来年以降はグループで応募して海外に行くことも可能になる。双葉郡のよさを地域外へ、そして世界へ発信するためにも、こうした制度も活用しながら世界に広げていただきたい。

○ 秋元副座長（川内村）

〔意見〕 コミュニティ・スクールは、双葉郡では葛尾村と檜葉町と私の川内村で設置している。来年度は広野町での発足が予定されており、いずれ全体に広がってくるのではないかと考えている。来年度は第2期復興・創生期間の折り返しを迎える年となり、第3期推進計画に基づいて、効果を確認しながら着実に事業を進めていく必要がある。アンケート調査において、我々の取組が保護者や地域へ十分に浸透していないことが明らかになったため、そのあたりを来年度は意識的に取り組んでいきたい。

## 2) 各町村教育委員会の現状と課題

○ 秋元副座長（川内村）

川内村では、義務教育学校として教育施設の集約化を導入して2年が経過しようとしている。システム自体は定着しつつあり、効果も一部感じられるが、学力向上の具体のデータを示すまでにはもう少し時間が必要である。一方、併設したコミュニティハウスの利用者は1月現在で1,562名で、昨年1年間の利用者数を377名ほど上回っている。コミュニティハウスの利用のしかたとしては、後期課程生のアイデアで、自分たちの自習に使うほか、低学年生への学習指導や読み聞かせなど活用が広がっている。コミュニティハウスは、議論を深めるための仕掛けづくりがひとつのハードルだと考えており、ワーキンググループや部会の立ち上げなどに来年は取り組んでいきたい。

○ 坂本指導主事（浪江町）

まず、1点目、児童生徒の在籍状況であるが、今年度4月に、小学校27名、中学校12名、計39名でスタートし、現在50名まで増えているが、特に困り感のあるお子さんの問い合わせが多い。転入後は、事前に困り感を理解し共有するために、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの方々にも協力をいただいている。

学力向上として、個別最適化ということで学習アプリ英語のアプリを用いている。デジタル教科書やロイロノートの使用状況は本日見学いただいたとおりであるが、小中が同じ校舎にあることから、理科と社会の授業は中学校の教員による小学生への指導などの工夫を行っている。学習環境は非常に恵まれているものの、自律した学習態度の育成が課題となっており、今後、県の学力政策の「家庭学習のスタンダード」等を活用して改善していきたい。特色ある教育ということでは、専門家を招いて演劇ワークショップや哲学対話に取り組んでいる。令和5年度は哲学対話（P4C）を教育課程に完全に位置づける計画である。

働き方改革や組織の活性化についてであるが、浪江町も県と同様の「多忙化解消アクションプラン」を作成して取り組んでいるが、来年度から研修履歴作成が義務化されるため幼稚園での働き方改革が急務である。

浪江町では今年度初めて指導主事を設けた形となるが、次年度は双葉郡内の指導主事の先生方と情報共有を活発にしていきたい。

○ 小野田委員（葛尾村）

葛尾村は今年の6月に帰村7年目を迎える。村民は現在1,300人強で、そのうち村に戻っているのは320人程度、いまだ避難中の方は820名、新たに入ってきた方が160人ほどと、非常に少ない状況にあるが、村民はみな優しくつながりがしっかりしているというよさを大切にしていきたい。

先般、福島民報が募集した「ふくしまジュニアチャレンジ」に全校生3人の葛尾中学校が応募してグランプリを受賞することができたが、これもふるさと創造学の取組が評価されたものと考えている。また、小中学生は、コロナ禍にあつてなかなか交流できない村の人を元気づけるため、新聞投稿という方法を見つけて取り組んでいる。掲載されると村民からさまざまな反応があり、紙面を通じた交流が生まれている。

子どもの数が少ないために、ふるさと創造学をはじめ、小学生の絆づくりや生徒会連合など、他校の同世代の児童生徒と交流できるのは大きな力になっており、今後もこうした取組を大切にしていきたい。

○ 舘下委員（双葉町）

双葉町は、ようやく昨年8月30日に帰還困難区域の一部の避難指示が解除され、9月5日には双葉町役場が新庁舎での業務をスタートした。町長の言葉を借れば「復興の加速の年」になるだろうし、また、そうしなくてはならないと考えているが、町営の復興住宅もまだ建設中で、本格的な復興はこれからというのが現状である。学校としては、いわきにある仮設の町立学校に幼小中で現在42名が在籍している。

大きな話題としては、1月15日から1月20日まで英国への表敬訪問を実施した。これは町内の2名のALTのふるさとが英国であったことから友好都市の提携を結ぶべく書簡を持って訪れたものだが、現地ではとても温かく迎えられ、今後の交流へとつながった。

2月20日には町長と教育委員会とで総合教育会議が開かれたが、これから学校再開に向けた議論が加速的に進んでいくものと思われる。双葉ならではの教育を考えたときに、さきに述べた英国表敬訪問を端緒にして海外との交流を図っていくなど、教育長として新しい学校のビジョン策定に取り組んでいきたい。

○ 松岡教育長職務代理者（大熊町）

大熊町は、震災以降、会津若松市に避難し、義務教育学校も会津で開校していたが、この4月からようやく学校が町に戻る。それに先立ち、2月22日にはお世話になった会津の方々へ感謝を伝える集いを執り行う予定である。ただ、町内施設の建設が遅れており、使えるのは2学期から、1学期は町の施設を分散して利用することになる。

子どもの人数としては、認定こども園が8名、義務教育学校が18名、合計26名でのスタートとなる。問題点としては、自校給食が難しいため浪江町から融通してもらうことになった。また、学校施設も理科室などの特別教室やプールについては、当面は富岡町の施設を使わせていただく。こうした多方面からの援助に心から感謝したい。

新校舎は立派でユニークな施設となるが、それに見合う学校教育が行われるように先生方をサポートしていきたい。

○ 岩崎委員（富岡町）

現在、富岡町の園児・児童生徒数は、年度当初と比較すると、こども園が54名から58名、小学生は35名から43名、中学生は21名から23名と、わずかだが増えている。しかし、各学年は1桁の少人数学級であるということに変わりはない。

本町では、学校が町に戻って以降、特色ある教育活動を行っているが、その中でも、さまざまな分野のプロが転校生として子どもたちと過ごす「プロフェッショナル・イン・スクール（通称：PINSプロジェクト）」、楽しく健康増進と体力向上に取り組む「EIP9プロジェクト」、さらに、多様な考え方を受け入れ、対話を通して最適解を見つける「ピースフル・スクール・プログラム」、これらは特に子どもの成

長により効果があったため、次年度も継続して進めていきたい。

子どもの数が増加しているのは主に移住家庭の増加によるもので、子どもの心のケアと保護者理解が必要になることから、学校、こども園、教育委員会のみならず、福祉課、健康づくり課、心の支援センターとの横の連携を強化して積極的に情報交換をしている。また、年度途中の転校生が多くなれば学習の進捗や町の理解度も異なるため、教育内容の見直しも求められる。我々はこれまで被災者としてさまざまな支援を受けてきたが、これからは「される側」から「する側」へシフトチェンジしたふるさと創造学として再スタートを切りたい。

○ 青木委員（檜葉町）

檜葉町では今年度の4月から小学校2校を統合して「檜葉小学校を」としてスタートさせた。また、余裕教室を活用して地域学校協働センターを設置し、放課後事業としてさまざまな体験活動を子どもたちに提供している。また、敷地内に放課後児童クラブの建物を新設し、放課後事業終了後に子どもたちが過ごす場所としている。

子育て支援策としては、母子保健と児童福祉、教育分野をひとつにまとめた「こども課」を設置し、一体的な行政サービスを提供している。特別支援教育に関しては、妊娠期から学童期までの切れ目のない支援を行うほか、保護者の希望に基づいて、教育や福祉の各分野の担当者が参集しての「入学サポート会議」を実施している。

学校においては、今年度から学校運営協議会をスタートさせて、全体会議のほか、地域の見守り、放課後の活動、学校運営協議会の運営という3つの部会を設けて活動している。

子どもの数は、現在、こども園が127名、小学校が129名、中学校が45名であり、個別支援が必要な子どもの数が増えつつある。小中学校とも知的の特別支援学級を設置しているが、境界線付近の子どももいることから、教員の加配について継続的によろしくお願ひしたい。

○ 根本委員（広野町）

今日は中学校の授業を参観していただき感謝申し上げます。来年度、JFAアカデミー福島の新入生が18名入る予定で、3学年全体では53名となり、本来の広野町の生徒数よりも多くなる可能性がある。子ども同士の意思疎通はもとより、進路が固まっているアカデミーの新入生とこれから進路を決めていく広野町の子どもたち双方について十分に留意して教育に当たっていききたい。

ふるさと創造学には非常によく取り組んでおり、今年度はふるさと創造学の総仕上げとして中学3年生が「広野町子ども議会」に参加した。町長はじめ町の執行部に対して問題提起して質問を投げかけている姿に頼もしさを感じたところである。

生徒の学力に関しては、学調の結果から国語力に問題があることが明らかになったため、学校の図書館活動の活性化を図らなければいけないと考えている。令和5年度については学校司書の配置と図書館の図書管理システムの導入など、読書活動に導くような方策を講じていきたい。

転校してくる子ども特別な支援を要するケースが増えていることは他町村と同様であるが、情緒障害の場合には特別支援学校に入学できないとなれば教育としては不公平感が残る。これについては、文科省や県教委の支援も得ながら改善策を講じていきたい。

3) ふたば未来学園中学校・高等学校活動報告

○ 郡司委員（ふたば未来学園）【資料7】

本校は文部科学省から今年度までの3年間、「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」に取り組んできた。今回はその成果を報告させていただく。

本校の総合学科は中高6年間を通した探究カリキュラムとなっている。課題探求を支援するために課題設定ワークシートを開発するなど、生徒の自発的な活動を促している。令和5年度から従来の6つのゼミを学術分野ごとに編成し直すものとする。このゼミ編成は福島国際研究教育機構（F-REI）の研究分野との重なっており、F-REIにも我々の取組が整合性をもって反映していきたい。

未来創造探究においては、8町村すべての町村での探究活動を行っており、生徒たちは300近いプロジェクトを立ち上げている。コンソーシアムについては、早稲田大学の協力を得て「ふくしま学（楽）会」を開催しているほか、NPO法人カタリバが本校内に常駐するなど、コンソーシアム構築はうまく進んでいる。

海外研修については、コロナ禍の影響で代替事業を2年間行ってきたが、今年度からようやく海外研修が実現した。また、現在までに留学生も2名来ており、こちらからも留学生を送り出している。

教員の生徒に対しての関わり方であるが、指導経験からロールの傾向を分析したところ、自ら手を動かして創造性を誘発する「ジェネレーター」の部分が低かった。探究の効果的な伴走方法については、校内研修「未来研究会」によって主にワークショップ形式で実施している。生徒の変容についてはルーブリックを作成し確認するが、どんどん生徒たちの自己評価が向上している。ただ、「英語力活用」が低い結果となった。本構想の数値目標に対する達成度については表に示したとおりとなっている。

今後に向けて、さらに探究を進化させるため、文科省のWWL事業の申請を計画している。これまで以上に輝く学校であり続けるために、生徒の探究学習、そして教員の校内研修を意欲的に取り組んでいきたい。

最後に、入学試験の時期となったが、定員を上回る応募がある。来年4月に中高一貫生が高校3年になり、静岡のJFAアカデミーの生徒が戻ることから、10年目でようやく完成年となる。精いっぱい地域の期待に応える取組を行っていきたい。

#### 4) 令和5年度推進体制・行事計画(案)について

##### ○ 秋元副座長(川内村)／事務局(清野)【資料4】【資料5】

秋元副座長より、構成員である東日本大震災復興支援財団を「有識者」に改めたい旨の提案があり、全会一致で承認された。また、事務局より次年度の取組内容と予定について説明があり、了承された。

#### 4) その他

##### (1) 委員からの情報共有

##### ○ 安彦委員(文部科学省初等中等教育局)【資料6】

文科省としては、引き続き就学支援、教職員の加配、スクールカウンセラー活用事業等を継続していきたい。「ふるさと創造学」は最先端の取組であることから、この価値を全国に共有していただきたい。特にWWLは、ふるさと創造学が地域での取組につながっていくコアになりうるものと思っている。

資料にある事業を中心に文科省としても取組を加速し、教育の復興に向けて文科省としてもしっかり支えていく。特に「STEAM教育」の取組の「A」の部分に注目しており、難しい課題が生じた場合に、実は芸術や人文社会など意外なことが解決につながることもある。ふるさと創造学はF-REIともうまくつながって地域の発展に必ずやつながっていくと考えている。今後も幅広い取組を期待したい。

##### ○ 堀家教育総務課長(福島県教育委員会)【資料9】

来年度の政府予算においては、福島の復興関係にしっかりと必要な予算を確保いただいたことに御礼申し上げます。

福島は第2期復興・創生期間の折り返しを迎えている。「VUCAの時代」といわれるとおり、子どもたちを取り巻く現状不確実で曖昧な複雑な時代に入っている。加えて福島は復興・創生のさなかにあるという特有の課題があり、この二重の大きな課題に立ち向かわなければならない。しかしそれは、世界の教育が目指している「分断を乗り越えて価値を創造する」教育に先進的に取り組んでいるともいえる。さらに、浜通りを中心としたごく少人数の教育は、日本全体がこれから直面していく課題でもあり、設置主体の枠を越えてオンラインでつながるような取組は、まさにその先進例である。

来年度4月、浪江町にF-REIが設立され、福島県はシームレスにつながる人材育成に取り組んでいく。人口が減少し資源も乏しい日本は、イノベーションを通じて価値を創造して成長・発展していかなければならない、今後もこれらの取組を国や各町・各機関と軌を一にして進めていきたい。

##### (2) 今後の協議会開催予定(中田座長・福島大学)

次年度も5月と2月の2回ほど、双葉郡内での開催を予定している。日程等のご協力をいただきたい。

## 4. 閉会

(以上)